

5-3. ゾーン区分及びゾーン別方針

ゾーン区分は、谷戸地形がつくる樹林～湿地までを一つの環境単位としてとらえ、ゾーニングの大きな枠組みとした。

この大きな枠組みに、これまで検討した保全と活用の方針や、樹林地の構成、水系や湿地の構成を加え、自然環境の特性及び利用と保全の両面からゾーン区分の抽出を行った。

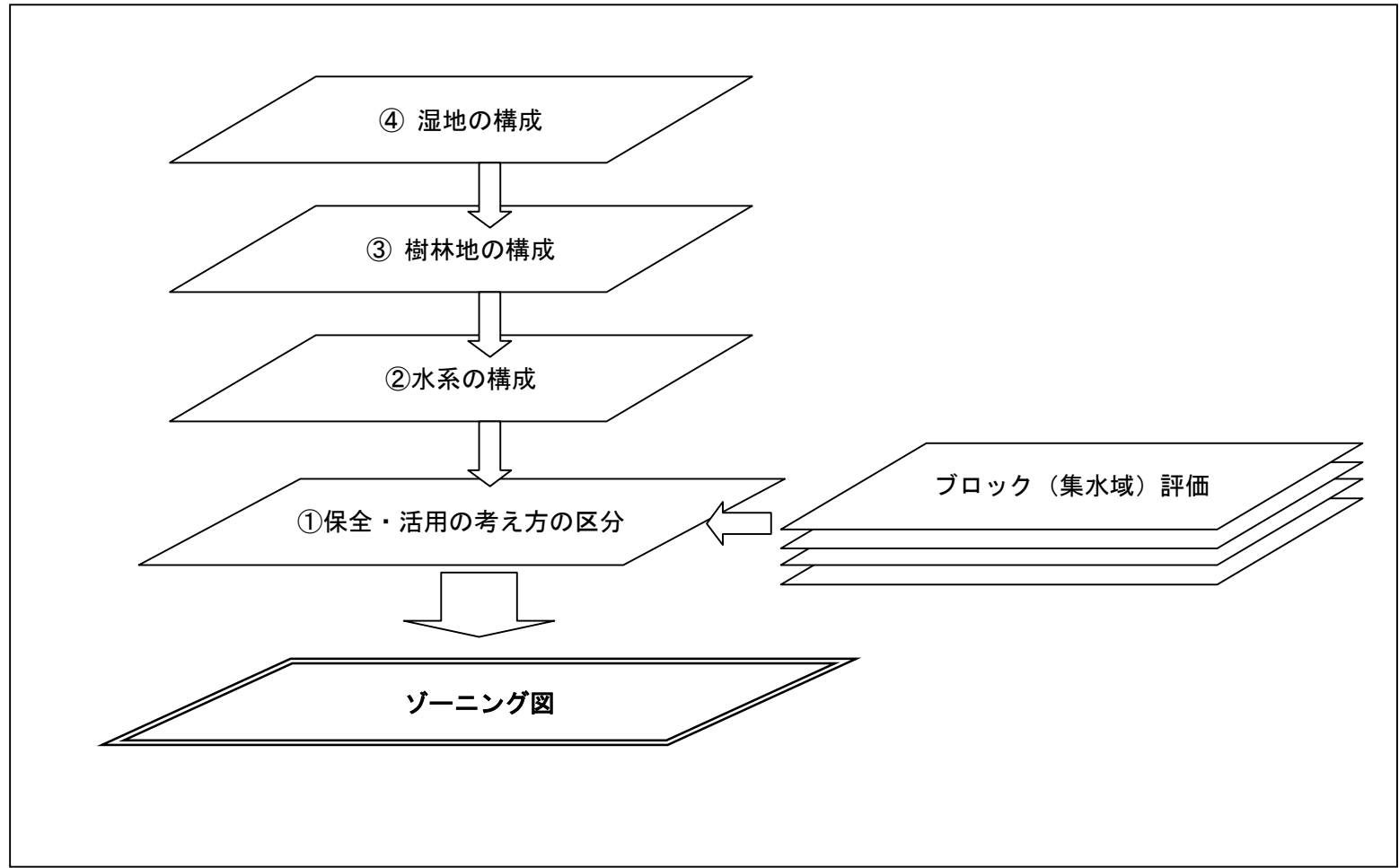


図 5-4 ゾーニング計画のフロー図

1) ゾーン区分の抽出

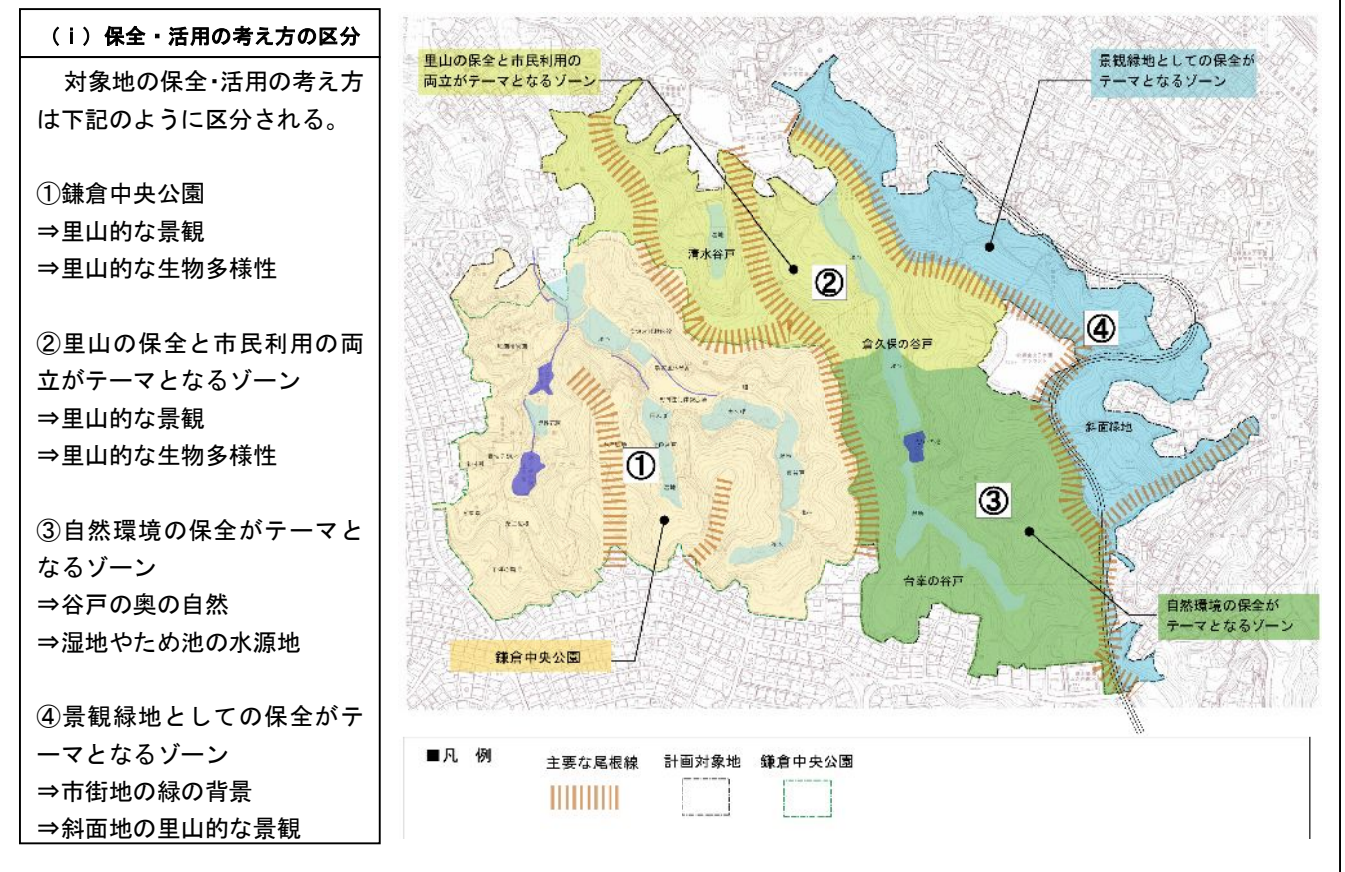


図 5-5 保全・活用の区分図

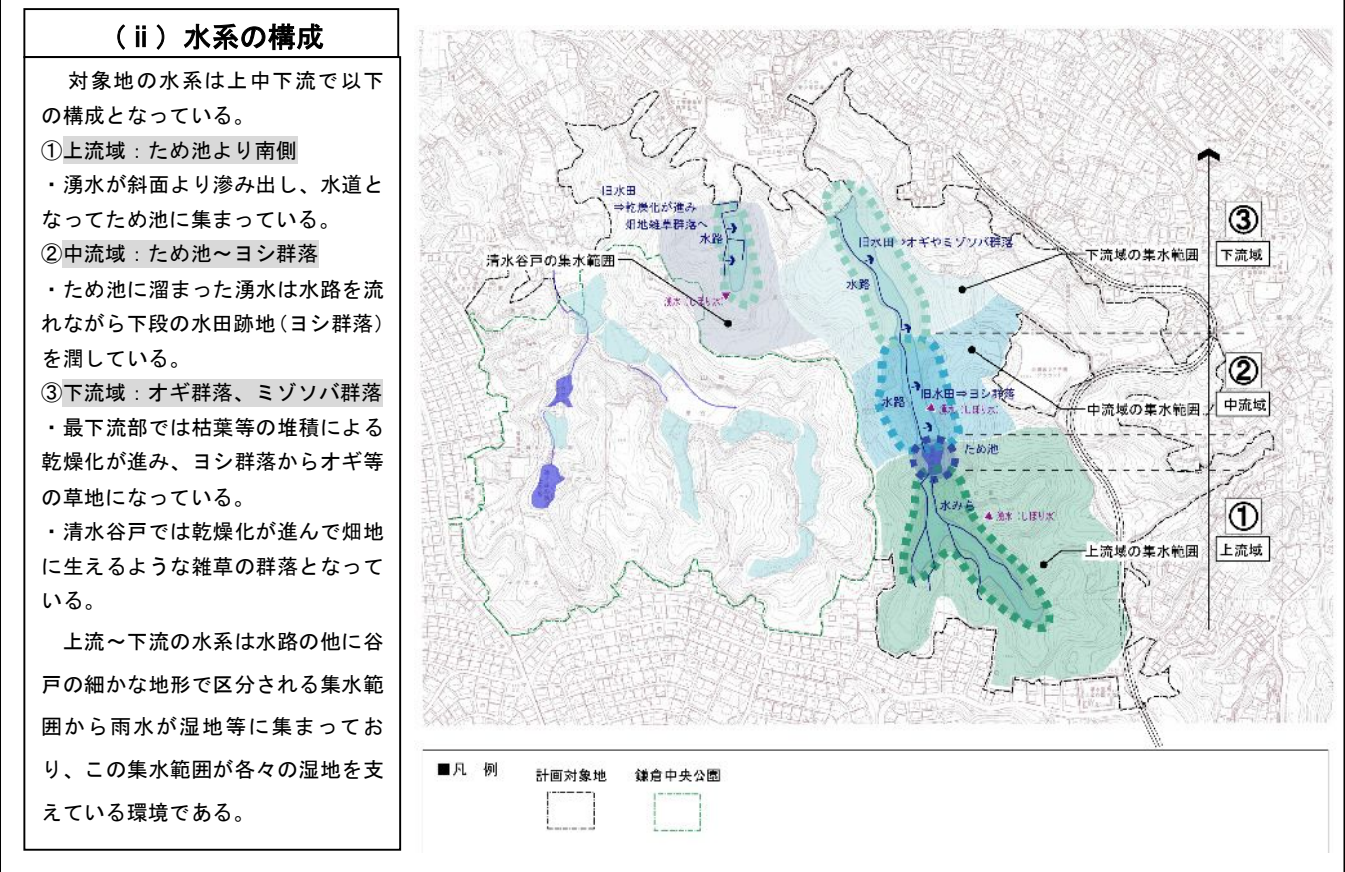


図 5-6 水系の構成図

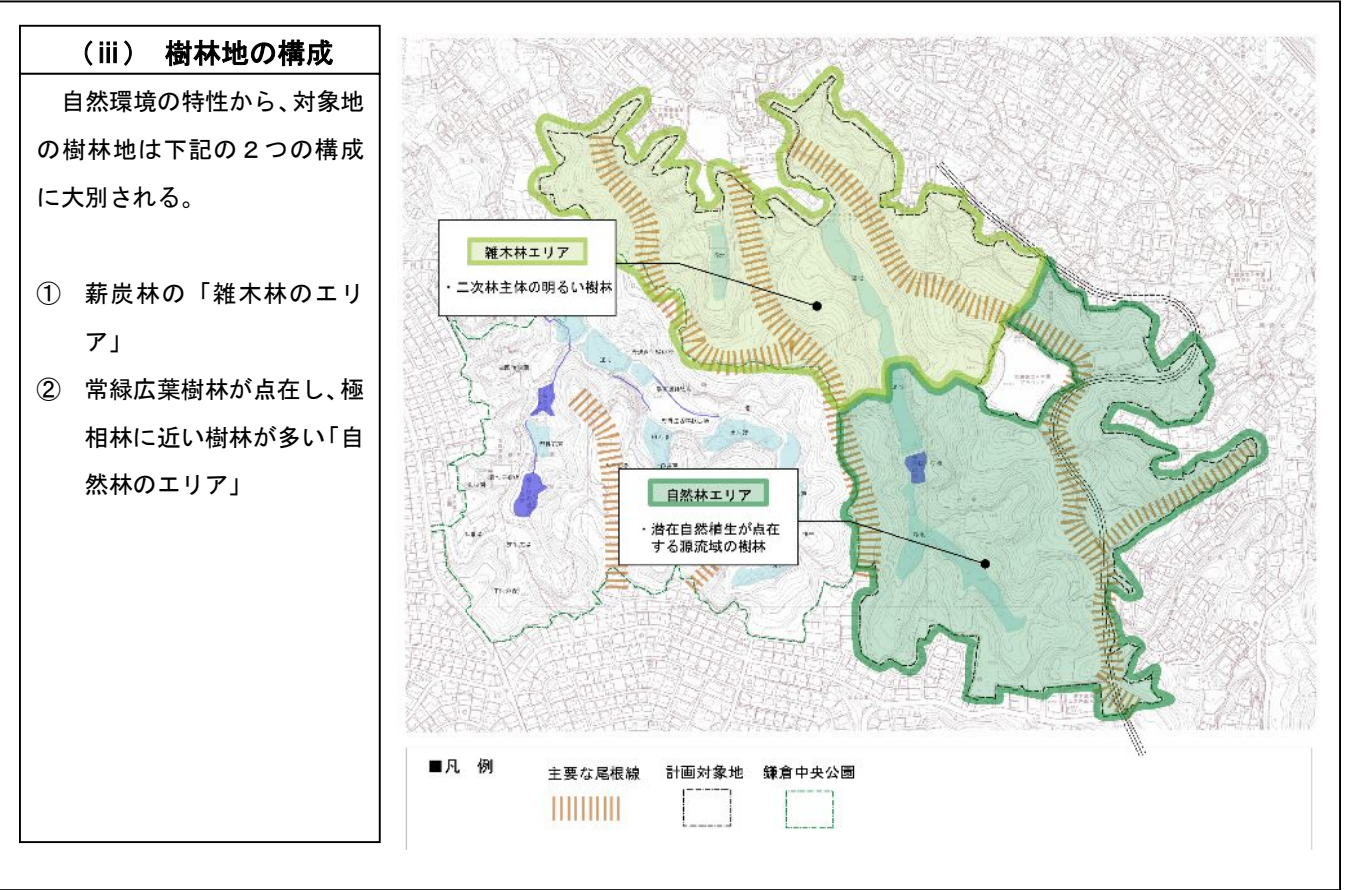


図 5-7 樹林地の構成図

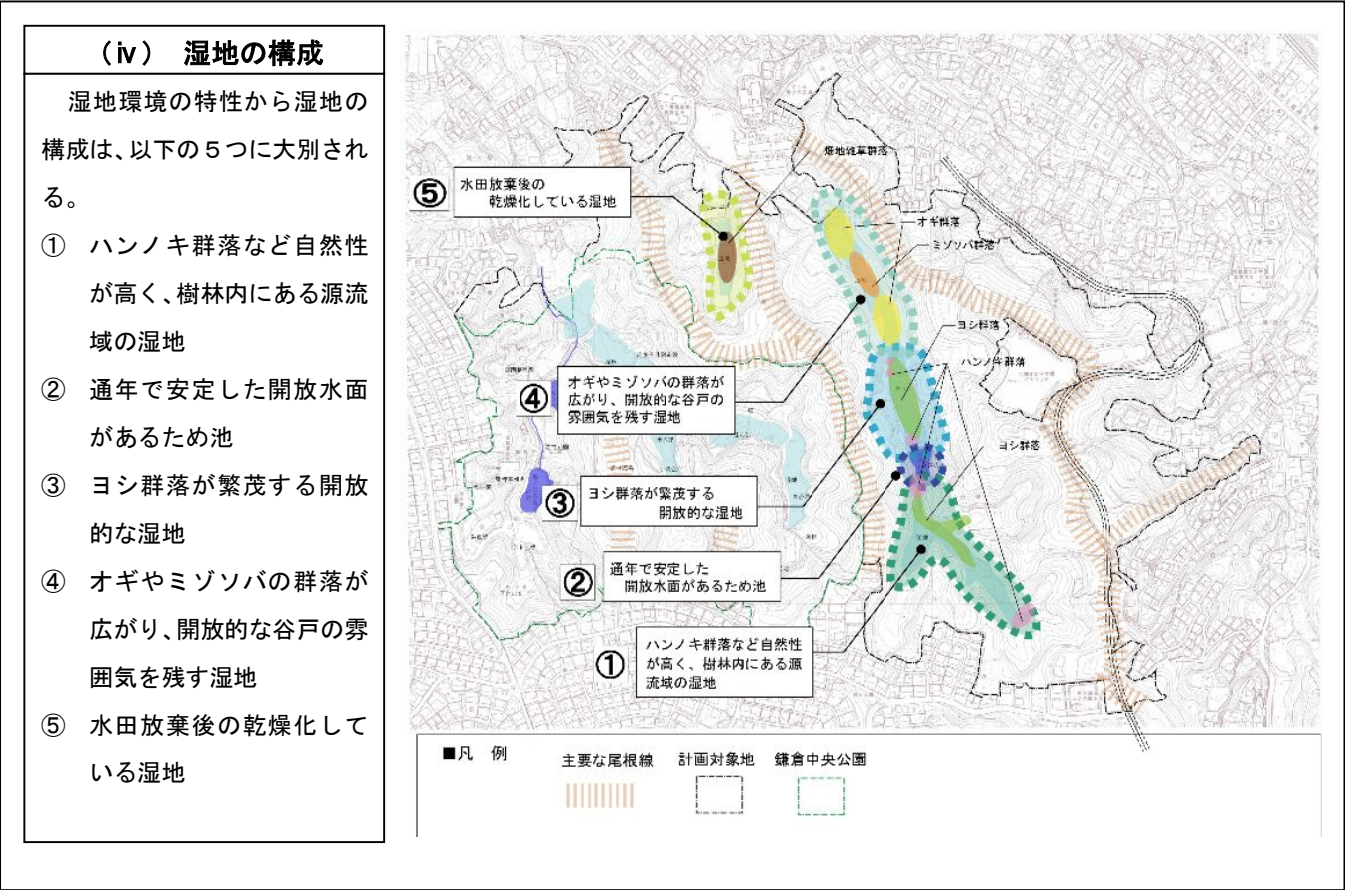


図 5-8 湿地の構成図

2) ゾーニング図 (案)

■ : ゾーン、□ : エリア

① 源流の森と里山の保全ゾーン

- ため池の集水域や湿地、常緑広葉樹の自然林を保全しながら台峯の谷戸の源流域を守るゾーン

② 里山の保全ゾーン

- ヨシ等の湿地やコナラ林等の雑木林を適切に維持管理しながら里山の自然と景観を保全するゾーン

③ 里山再生ゾーン

- 耕作放棄地となった清水谷戸を里山の環境に積極的に再生するゾーン

④ 景観緑地と里山の保全ゾーン

- 北鎌倉の景観を形作る斜面緑地を適切に保全し、尾根筋に残された里山の環境・景観を保全するゾーン

a. 源流域の湿地保全エリア

- ため池や源流域のハンノキ群落などの自然性の高い湿地環境と生態系、景観を保全するエリア

b. 里山の湿地保全エリア

- 倉久保の谷戸に残されたヨシの湿地景観と生態系を保全するエリア

c. 里山の湿地再生エリア

- 谷戸の最下流部で乾燥化が進む湿地を改善し、開放的な湿地景観と豊かな生態系を再生するエリア

d. 水田・湿地再生エリア

- 清水谷戸の水田放棄地を水田や湿地に再生し、参加体験型の環境学習を積極的に提供するエリア

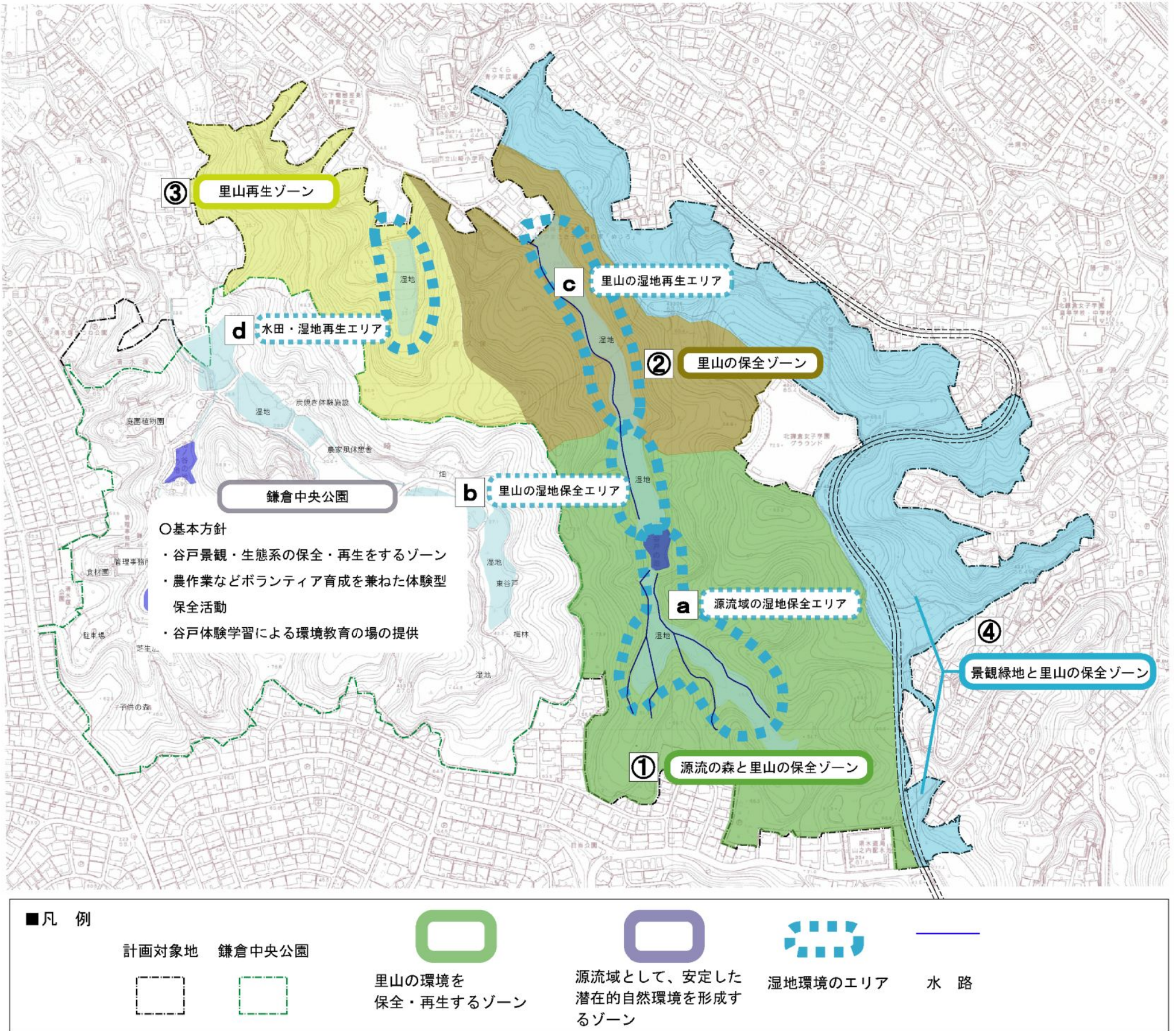


図5-9 ゾーニング図 (案)

3) ゾーン別の方針(案)



: ゾーン、



: エリア

	ゾーンの方針	ゾーン	ゾーンの特性・現状	保全の方針	保全の課題
鎌倉中央公園	●テーマ 【自然が生きづく水と緑の公園】 ○基本方針 ・谷戸景観・生態系の保全・再生をするゾーン ・農作業などボランティア育成を兼ねた体験型保全活動 ・谷戸体験学習による環境教育の場の提供				
台峯緑地	源流域として、安定した潜在的な自然環境の形成を図る	① 源流の森と里山の保全ゾーン	・台峯緑地の水源域 ・特に南斜面には、常緑広葉樹の潜在植生が形成されており、また湿地にはハンノキの群落のまとまったものが形成されている。	・台峯緑地の水環境の安定を図るため、源流域の自然性の高いゾーンとして保全する。 ・常緑広葉樹の潜在植生への遷移を促し、安定した水源域の自然環境の形成を図る。	・耕作地や耕作放棄地 ・常緑広葉樹林の保全育成
		a、源流域の湿地保全エリア	・台峯の谷戸の源流域に広がる自然性の高い湿地 ・ため池とハンノキ群落の台峯緑地を代表する景観を有する。	・ため池やハンノキ群落などの自然性の高い湿地環境と景観を保全する。	・湿地・ため池の保全 ・ハンノキ群落の保全
		b、里山の湿地保全エリア	・台峯・倉久保の谷戸の中流に広がる湿地。ヨシ群落が発達している。小規模だがハンノキ群落も点在している。 ・湿地は乾燥化が徐々に進んでおり、長期的には、草地に遷移することが予想される。	・里山の谷戸の湿地景観と自然を保全する。 ・ヨシ群落・ハンノキ群落を保全し、湿地景観、湿地環境を保全する。	・ヨシ群落の保全
	里山の環境を保全・再生する	② 里山の保全ゾーン	・開放的な谷戸地形に湿地景観が広がり里山の谷戸景観を呈している。 ・谷戸の斜面は、コナラ等の雑木林が主体。林内は立木の密度が高く林床はアズマネザサが繁茂し、林床植生が貧弱になっている。 ・湿地や水路の水際～林縁～樹林の生態系の連続は、多様な生物の生息環境を形成する重要な環境となっている。	・里山の谷戸の景観と自然を保全する。 ・特に多様な生態系が連続する湿地や水路際、林縁の保全に配慮する。 ・コナラ等の雑木林は、適正な密度管理を行い、林床植生が発達した植生を保全する。	・耕作地や耕作放棄地 ・雑木林の健全化
		c、里山の湿地再生エリア	・倉久保の谷戸の下流に広がる湿地。オギ群落やミゾソバ群落が発達している。 ・湿地はすでに乾燥化が進んでおり、近い将来、草地に遷移することが予想される。	・里山の谷戸の湿地景観と自然を再生する。 ・オギ群落やミゾソバ群落を適度に湿地に再生し、草地への遷移をコントロールする。	・オギ群落、ミゾソバ群落の遷移のコントロール
		③ 里山再生ゾーン	・田畑が放置され乾燥化、雑草の群落が繁茂している。 ・隣接する市立山崎小学校で、環境学習活動のフィールドとして活用されている。	・放棄された田畑の里山再生を図るゾーン ・湿地環境や雑木林や竹林の再生を積極的に行う ・参加体験型の環境学習を提供する。	・耕作地や耕作放棄地 ・雑木林や竹林の健全化
		d、水田・湿地再生エリア	・水田放棄地が乾燥化した湿地 ・隣接する市立山崎小学校で、環境学習活動のフィールドとして活用されている。	・乾燥化した湿地を自然性が高い湿地環境や水田に積極的に再生する ・参加体験型の環境学習を提供する。	・湿地の再生、水田の再生
		④ 景観緑地と里山の保全ゾーン	・横須賀線車窓から、市街地の背景をつくる景観緑地で、鎌倉の都市景観計画における“北鎌倉ベルト”の緑背景を担う。 ・斜面下の住宅地に対し、土砂流出の抑制機能を有する。 ・落葉樹の二次林、スギヒノキの植林、畑地等、多様な植生が混在する。	・古都鎌倉の玄関口、北鎌倉の背景となる美しい斜面林を形成する。 ・尾根筋に残る耕作地など、斜面に残る里山の景観や自然の保全を図る。 ・土砂の抑制機能として安定した樹林地の形成を目指す。	・耕作地や耕作放棄地 ・雑木林や植林地等の健全化

表5-1 ゾーン別の方針(案)

4) 耕作放棄地・畑の整備方針

■耕作放棄地の整備方針について

台峯緑地内には畑が放棄され、クズやアズマネザサの単純な植生になっている耕作放棄地が点在している。これらは高い密度で繁茂し、遷移を停止させるため、緑地全体の生物多様性に寄与できるものではない。緑地の生物多様性を高めるためには、刈り取りを行い、広場的草原にするなど積極的な活用も視野に入れ、草地（原っぱ）へ遷移をコントロールする必要がある。

草地も里山の生態系の一つであり、草地を好んで生息する生物も少なくない。里山の植生として適度な規模を保全する。草地は草刈頻度を高く管理しなくては維持できないため、維持管理の利便性等も考慮した草地の創出を図るものとする。

また緑地内のアズマネザサやクズの群落は、まとまった面積であり、刈り取りを一斉に行うのは、緑地内に裸地が点在することになり、生態系への影響上、また景観上、好ましくない。刈り取りを行う範囲については、年数をかけて徐々に面積を増やし、また刈り取り後の植生遷移の状態や生息生物のモニタリング調査を行い、刈り取り頻度や面積等を調整していくものとする。

■畑の整備方針について

緑地内には現在も畑として耕作され、手入れされた畑土を保っている耕作地が小規模ながら点在している。これらの畑は、人と生物が共生する里山的な生態系の一つであり、市民参画等による維持管理を行うことで環境学習の場としても利用できるものである。

こうしたことから、現況の畑については、なるべく畑として継承していくものとするが、クヌギやヤマザクラなど将来存続が危ぶまれている樹木の苗木畑にすることやススキ草原を復元することなども視野に入れる必要がある。

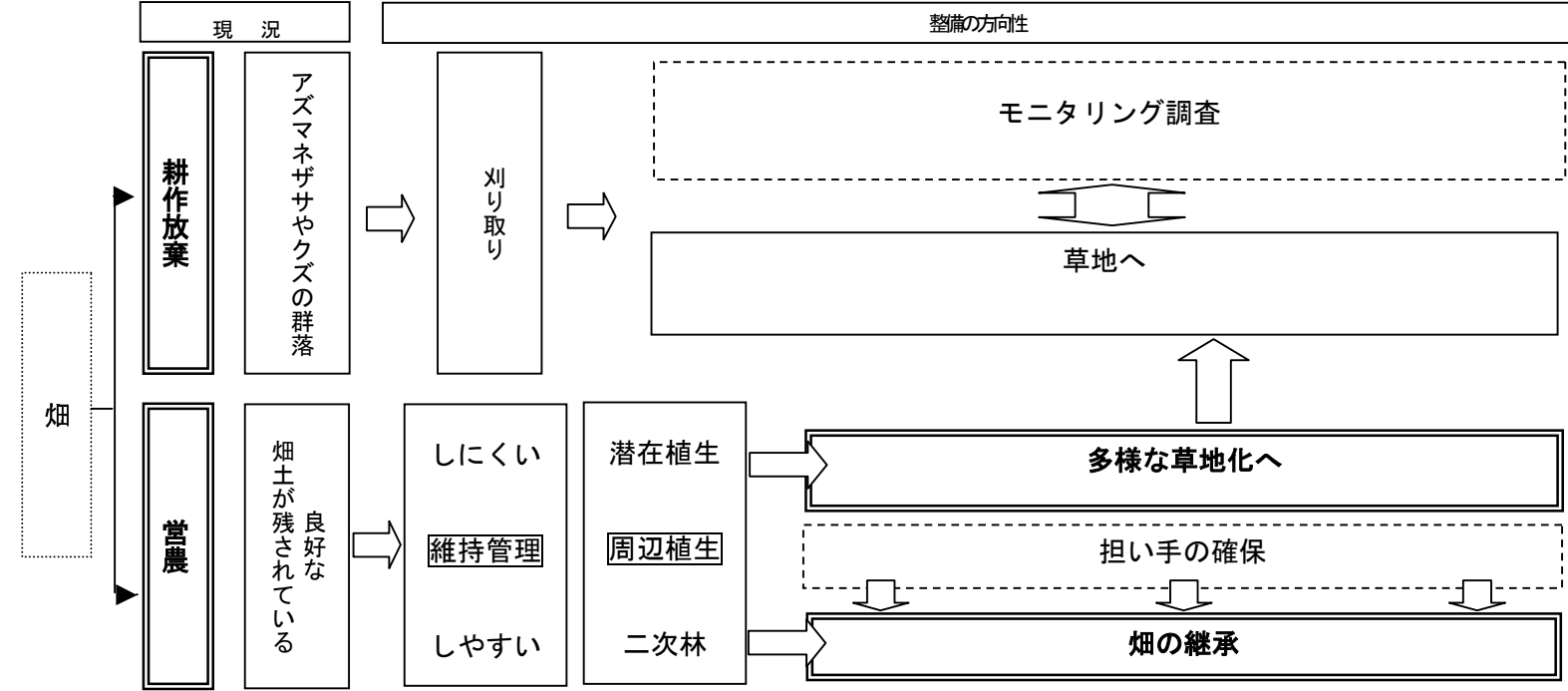


図5-10 耕作放棄地・畑の整備フロー図

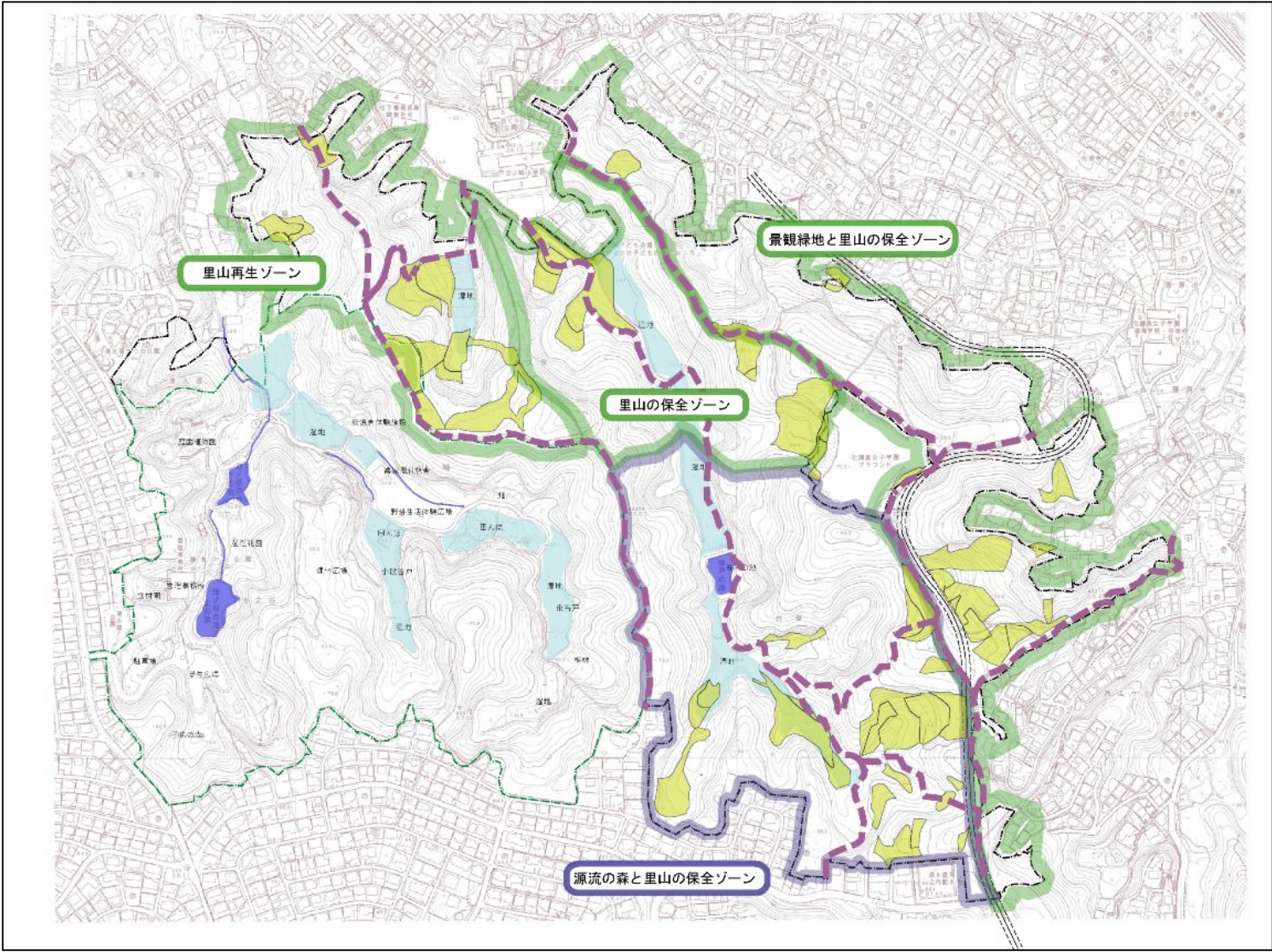
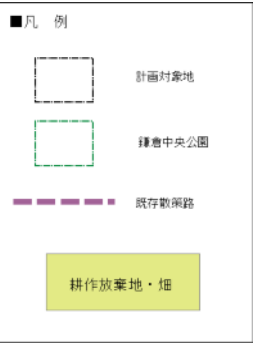


図5-11 耕作放棄地・畑の位置図